

第五回 図書館史を考えるセミナー

ここ数年来、大変な東京論ブームである。「世界」でさえ、この特集をくむ有様である。今回はそれに便乗するつもりはないが、「分散衰退」から「集積集中」を目指し、これまでの「地方の時代」は幕をおろして、「多極分散」をカクレミノに「東京集中」をすすめようとする四全総の方向が、図書館界に対して何をもちこたすか、図書館史研究の立場から検討してみたい。両者をストレートに結びつけることは困難かもしれないが、国家権力を背景に、また革新的な動きもいち早くあらわれる日本の中心・東京に所在する各種の図書館が、これまで全国の図書館にどのような影響を与えてきたか、また、地方はこれをどのように受容し、反発したのか、その軌跡を辿ることによって、今後の在り方を考えてみようと思う。

テーマ 「東京の図書館—図書館史上に与えた影響の検証」

日時 1987年9月6日(日)午後1時から

1987年9月7日(月)午後4時まで

会場 東京都文京区白山 東洋大学2号館第2会議室

参加費 2,000円 懇親会 4,000円(両方出席の場合は6,000円)

日程 9月6日(日)

受付	13:00 ~
開会	13:30 ~
発表(1) 国立図書館—その残した功罪	13:40 ~14:40
住谷雄幸(国会図書館)	
(休憩)	
発表(2) 東京に生まれた図書分類表—その普及状況を探る—	15:00 ~16:00
鮎沢 修(聖徳学園短大)	
発表(3) 東京の国立大学図書館—東大・一橋大を中心に—	16:00 ~17:00
田辺 広(鶴見大学)	
(懇親会 浦水会館)	17:15 ~19:00

日 程 9月7日(月)

発表(4) 東京の公共図書館—日比谷・大橋図書館の今日に 生きる伝統	清水正三(専修大学)	9:30 ~10:30
発表(5) 三多摩の図書館・その栄光と挫折—新たな発展に むけて	戸室幸治(福生市立図書館)	10:30 ~11:30
(昼食)		
発表(6) 東京六大学の図書館—全国の図書館に与えた影響	阪田蓉子(梅花女子大学)	13:00 ~14:00
総括討論		14:00 ~16:00
閉会		

(注意 論題・発表順序については若干変化があるかも知れません)

申し込み方法 同封の用紙に記入, または同形式のハガキでお申し込み下さい

1. 申し込み締切 8月20日
2. 申し込み先

国立教育研究所内 油井澄子

3. 今回は宿泊の手配はしませんので, ご了解下さい。

研究委員会 委員長 石井 敦
委員 油井澄子, 工藤一郎, 守谷勝人
中川路加, 阪田蓉子

「図書館史研究」 第四号のお知らせ

目次 特集 民主主義運動高揚期の図書館運動

自由民権運動と図書館 新井勝紘

1915(大正4)年における東京市立図書館の機構改革
とその成果について 清水正三

教育会図書館の発展過程に関する一考察 奥泉和久

戦後民衆図書館史(一) 中川路加

「第四回図書館史を考えるセミナー」

報告者 山口源治郎 宇治郷毅, 石塚栄二, 赤星隆子, 寺田光孝

9月上旬発売 (会員には割引があります。それについては次回のニュースレ
ター〔9月中頃発行〕でお知らせします)

運営委員会報告 6月24日(水)午後7時30分から10時まで、東京・新宿の滝沢にて開催。出席は、工藤一郎、宇治郷毅、油井澄子、是枝英子、川崎良孝、阪田蓉子。「図書館史研究(第四号)」, 第四回セミナー(いずれも、別掲)について最終的検討を行った。

IFLA の図書館史ラウンド・テーブルの座長から、図書館史研究者の国際名簿をつくるため、名簿を送って欲しいとの依頼があり、前回の運営委員会で協力を決定するとともに、前回のニューズレターでその旨を掲載し、会員の合意を得た。しかし、ニューズレター発行後になって、さらに名簿記載についての詳細が送られて来た。この詳細はかなりの事務量(翻訳、調整など)を伴うものであるため、今一度、発行の見通し、収録の範囲などを詳しく問い合わせ、それによって更に検討することにした。

1988年のドイツで開かれる国際的な図書館史のシンポジウムについては、希望者があったが、テーマが各国における図書館史研究と図書館史研究団体についてであること、および当研究会に依頼が来たことから、発表者について渡航にかんする援助金がでないかどうか、ドイツに問い合わせることにした。

文献目録の件については、編集委員会で具体的に検討中である。

事務局より 図書館史研究会の口座番号は
名簿訂正

新入会員

ニューズレターの原稿を求めます。図書館史文献の書評、紹介を中心に、図書館史についての短文を希望します。枚数は400字×12枚程度まで。原則として原稿が到着した次号のニューズレターに掲載します。

送付先

川崎良孝

Jesse H. Shera *Foundations of the Public Library, The Origins of the Public Library Movement in New England, 1629-1855* (1949) について。

川崎 良孝 (椋山女学園大学)

標題の書を若干詳しく読む機会を得たので、いくつか感想を書いてみたい。この書については、いまさら説明を必要としないであろう。アメリカ図書館史研究の最高峰とされ、古典とされる。日本でもしばしば引用されている。というより、アメリカ図書館史を扱う論考は、すべてこの著作を引用するなり、なんらかの影響を受けていると考えてよい。と同時に1970年代半ばから、手厳しい批判をうけているのもこの本である。

まず、この著作の副題をみると「1629年から1855年におけるニューイングランドのパブリック・ライブラリー運動の起源」となっている。ここから、同書は極めて、地域的に限定した扱いをしていると考えられるし、実際のところ、ニューイングランドという一つの地方に限定した記述を展開しているにすぎない。しかしながら、シェラが繰り返し指摘、示唆するように、シェラはより広い、普遍的とも言える展望を展開している。すなわち、社会状況がニューイングランドに近づけば、どの地にもパブリック・ライブラリー（公立図書館）が成立すると論じているのである。極端に言えば、同書はアメリカの一つの地域を扱う図書館史であると同時に、世界的な視野でみた場合、その社会なり地域なりで公立図書館の成立と発展の可能性を探る判断材料にもなるということである。この包括性が、同書の大きな特徴であり、魅力でもある。この包括性や普遍性が、筆者にとっても大きな魅力であるが、同時に多様性と発展の諸類型を認めないという点で、大きな問題をはらんでいるのは言うまでもない。この観点からのシェラへの批判は、間接的であれすでにSidney Jacksonなどが提起している。

シェラは、公立図書館の成立と発展をもたらした要因として「経済力」「歴史研究、資料保存」「地元の自負心」「公教育の社会的重要性」「職業的関心」「自己教育」という六つの要因を抽出した。こうした方式は、単に要因を列挙するにすぎないとの批判も出されている。Michael H. Harris によれば、「何が一番大きな要因なのか」「何が公立図書館に最も期待されたのか」という観点が多分に抜けているということである。この方向からは、二つのアプローチが出てくるだろう。一つは、各要因のより精緻な実証的分析と、それにもとづく要因間の比較検討である。いまひとつは、他の要因の導入にもとづく新しい解釈の提供である。後者はHarrisなどの一連の業績にあらわれている。

同書の読み方に関連して見逃せない点は、上述の記述から理解できるように、全体として見た場合、個人の役割を重視していないということである。シェラは確かに多くの個人を扱い、その引用をふんだんに本文中に組み込んでいる。しかし、そうした記述や引用は、より抽象化された社会的要因へ結びつけるための手段としての位置にあり、それ自体が目的にはなっていない。たしかに、諸社会的要因を結びつけ、図書館を成立させ発展させるのは人間であるとシェラも認識している。しかしながら、シェラにとってまず最初（あるいは、最終的）にあるのは、あくまで「経済力」といった高度に抽象化された諸要因なのである。この点で、シェラは「社会的要因理論」の代表者と考えてまちがいはない。こうした観点からみると、M.Harrisの解釈は徹底した個人思想の重視となり、シェラとは対極に位置する。そして、その中間にSidney DitzionとDee Garrisonが位置すると考えてよい。Harrisの解釈は、G.Ticknorの図書館思想を基点に、鎖状に個人の思想をつないだものと考えられても仕方がない。Ditzionは個人思想と社会との繋がり重視し、その相互関連を重視している。Garrisonは、個人の分析をとおして、図書館員という集団の性格を決定し、その性格と図書館との関連を重視している。

いうまでもなく、社会的、経済的要因の重視は、単にシェラ独自のものではない。シェラは、図書館を、社会制度（social institution）にたいする上部構造として社会機関（social agency）と把握することが、図書館の基本的理解に不可欠だと強調した。この点を強調したのは、直接的には、J.Ballardの業績である*Social Institution*、すなわち図書館を社会制度と捉える立場への反論のためである。しかし、より重要なことは、図書館にたいする基本的な把握の仕方が「社会的要因理論」を生んだことであり、こうした歴史への接近法がシカゴ学派図書館史学の大きな特徴になっている点である。シェラの方法と解釈を支える基盤、背景をまとめておくと次のようになるであろう。

まず、シカゴ大学大学院図書館学部の性格である。ここでは、図書館学を多分に社会科学と明確に位置づけることから来る影響である。同学部の性格については、あらためて論ずる必要はないであろう。A.Borden, J.Wellard, C.Joeckel, G.Spencerなどの図書館史研究、ひらたくいえば社会的脈絡の中で図書館史をみていくという視点の一つの掃結点がシェラの業績である。このシカゴ学派図書館学の図書館史研究をみた場合、アメリカ図書館史という意味でのマクロ図書館史研究の頂点が同書であり、ミクロ図書館史研究の頂点がG.Spencerのシカゴ市立図書館史である。Spencerの業績は、シェラ以上にシカゴ学派図書館史研究の精

髓を發揮していると考えてよい。シェラ、Spencer の両者に直接的な影響を与えたのが、とりわけJoeckel である。Joeckel は戦後図書館基準や全国計画にも中心的役割を果たしている。Joeckel の研究は未だ進んでいないが、その研究は、シカゴ学派図書館学の精髓を理解するのに必要なだけでなく、当時のアメリカの公立図書館状況を踏まえた現実的な図書館政策論を構想、実践している点で、極めて実り多いものになるであろう。

次に、シカゴ大学大学院図書館学部を取り巻く社会状況であり、大恐慌、ファシズムによる言論弾圧が重要になる。前者は、予算削減と利用者増しという状況を導いた。後者は図書館憲章の採択となって結実するとともに、図書館の本質と役割についての議論を喚起することとなった。この状況は、結果として図書館学を多分に社会科学と位置づけるシカゴ学派に有利に働いたと考えられる。ここから、図書館とそれを取り巻く諸状況との相互関連の解明が「図書館を理解する」「図書館史を知る」ということであるとの認識がはっきりしてくる。さらに言えば、相互関連を規定する側である諸状況の中から、重要な要因を識別、抽出しようとするのである。ここから「社会的要因理論」が出現するのはうなずけることである。もちろん、問題意識だけで歴史が記述できるわけではない。Bordenが口火をきり、シェラが完成した図書館史は、従来の年代記的図書館史研究の総体を土台とし、新たな歴史意識を適用することで完成したものといえる。

最後に、歴史学研究との関連がある。同書を読むと、とくにソーシャル・ライブラリーの章で典型的にみられるように、経済状況と図書館との関連を非常に重視している。この点に若干奇異な感じさえいさぐ。これは、C.Beard が衝撃的に提出した合衆国憲法の「経済学的解釈」の影響である。そして、「経済学的」解釈は歴史学の共通の財産になっていく。こうし史学の影響を受け、シェラはソーシャル・ライブラリーの設立数と不況・好況の関連を辿るといった関心の示し方をし、さらに要因としての「経済力」を重視したのであろう。一方、シェラの解釈は、人間の可全性を公立図書館の生命源としている。これには、シェラ自身も指摘するように、V.Parringtonの影響がみられる。Parringtonは、アメリカ文学の歴史的流れをA.Hamilton流の価値とT.Jefferson 流の価値の相剋・対立として描き、彼自身はつねにJeffersonianであった。こうした点で、シェラの解釈は、当時の歴史学の主流であった革新主義史学の影響を多分に受けていると考えてよく、シェラなどの図書館史解釈を革新主義図書館史学と命名しても決して的はずれではないであろう。

(受理 1987 年 6 月 25 日)